

『礼が教えてくれたもの』

茨城県

十王町武道振興会

中学2年生

幕田

雅

剣道における礼とは、相手を敬う心や誠意が言動に表されたものです。中でも頭を下げるという動作は、対戦相手に対し、無防備で攻撃意思が無いことを表すといわれ、武道家としての潔さを垣間見ることができます。

「ライバルに勝って一番になりたい。」

常に私はこの想いを胸に稽古に励んできました。しかし、ある大会で結果を残すことができず、肩を落としていたとき、母からひとつの指導を受けました。

「剣道で大切なのは勝ち負けの結果ではない。対戦相手に対し失礼な礼をするような者は今日限り竹刀は置きなさい。」

という厳しいものでした。

今思えば、試合に負け、悔しさの思いのみで礼をし、試合場を後にしたのでしょう。そのような行動を取っていたことに気付けない自分に情けない気持ちで一杯になりました。

あるとき、強豪高校の監督が書いた手記を目にする機会がありました。その内容は、生徒達を日本一に導くための指導方法でした。私は興味深く読み続けると、意外にも技術面については一切触れてはおらず、精神面のことのみについて述べられており、そこには、「勝敗が決まったときの態度に人間性、剣道への想いが全て表れる。その自制心の弱さが大事な試合の一本に繋がってしまう。」と記されていました。自制心とは自らの感情や欲望を抑える心と精神力であり、それは今の私に一番足りないものと強く感じ、後に次の目標をたてるきっかけとなったのです。

「正しい礼を学ぼう」

剣道は礼を重んじる武道です。形だけでなく、真意を理解し、実践することができれば剣道も人間も成長できると思ったからです。そして「打って反省、打たれて感謝」という言葉を念頭におき、負けることを繰り返しながらも正しい礼をすることを心掛けました。

試合はひとりではできません。対戦相手に感謝の気持ちを忘れず、切磋琢磨の場として捉えて礼をすることが大切です。その礼が自然とできるようになった頃、捨て身で打ち切ることができるようになりました。結果を求める心よりも、謙虚な心は剣道を変える力を持っていたのです。そして今年の夏、目標としていた大きな大会でその成果が現れました。その試合を見ていた母は、

「決勝戦、立派だったよ。礼も、剣道も。」とほめてくれました。その言葉を聞いたとき目に涙があふれました。その理由は試合に勝てたからではなく、正しい心構えのもとに身に付けた礼が間違いではなかったこと、そしてその取り組みによって成長した私と剣道を認めてもらえた嬉しさからのものでした。

今、私は礼節についても注意しています。礼節とは節度ある行動を意味しますが、試合終了後に歓声をあげ、喜びを表現している選手達を目にすることがあります。有効打突の直後にこのような行動を取れば、その判定は無効となるため意識しますが、一步場外に出て、試合が成立したからといって取ってよい行動でもないと思います。礼節は自制心から成り立つものです。これは試合中に限らず、試合後の敗者を思いやる心遣いにも活かすことが大切なことではないかと感じたからです。

「欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘れる。」

目先の勝負に捉われ、大切な礼の心を見失った経験から解ったことは、同じ剣道でありながら、結果重視の剣道と、精神修養の剣道には大きな隔たりがあったことです。しかし自らが進むべき正しい道を見失うことなく努力すれば、この距離は縮まり、理想の姿である、正しく、強い剣道に近づくことができるのではないかと思うと同時に、この取り組みこそが人間形成の道であると考えようになりました。これからも、礼に対する心構えを忘れずに、精進を重ねていきたいと思えます。

「お願いします。」

その一言に私の精一杯の思いを込めて。